

## 拒食と強迫性 -歴史に見る女性の食のあり方を通して-

増子友香、佐藤純子、金谷光子  
新潟医療福祉大学 看護学科

【背景・目的】拒食症の根底には、おしなべて「太ることへの強い恐怖」と「太ることを阻害するためのあらゆる努力をする」という強迫的特性が存在している<sup>1)</sup>。ここで述べる強迫性とは、“太るのではないか”という強迫観念によって生じた苦痛を、“太らないため”のあらゆる努力をするという強迫的行為を意味している<sup>1)</sup>。その行為を行うことで不安・苦痛からの一時的な安心を体験するが、実際に、それは持続的に繰り返される。

一方、宗教における一般の信仰者の祈りや願掛け等の儀式、時には断食等の自発的飢餓の中にも、それらを通して自己の欲望を放棄するなど、上記で述べるような強迫的な行為と類似したものが存在しているとフロイトは指摘している<sup>2)</sup>。すなわち宗教的な儀式行為にも、強迫性の持つ特徴と類似した防衛や保護手段が見て取れる。さらに、ビクトリア時代においても上流社会の中では、社会的装置として女性には「砂時計型」の体型が奨励されていた<sup>3)</sup>ことによって、女性たちの強迫的な食べ・吐きがあった。

現代における病としての拒食が強迫性を基盤とするが故に自己形成の難しさ、心理的諸困難があり<sup>6)</sup>、先進国の国境を越えて大きな課題となっている。

本研究の目的は、ヨーロッパにおける中世から近代までの女性の摂食に関する特徴ある行為(宗教的儀式・社会的装置としてのビクトリア時代の女性の痩身等)を通して、現代における病としての拒食と強迫性の関係について明らかにすることである。

【方法】歴史に見る拒食と強迫性に関する内容を扱った文献からその関係性を抽出した。主たる文献は、【文献】3)4)5)6)である。

【結果】主たる文献【文献】3)4)5)6)の中から研究者が【文献】2)のフロイトによる「強迫行為と宗教的礼拝」を参考にして研究目的に沿って下線を引いた。

断食は様々な文化の中で、夢・幻・天上の力の啓示を受けるための確実な手段として考えられていた<sup>5)</sup>が、キリスト教において断食は、欠乏による神への服従や、痩せ衰えた体は(天国の)狭き門をよりたやすく通れ、より速やかに復活し、痩せた体は墓の中でよりよく保存されるとされた<sup>5)</sup>。後の時代になると断食はより倫理的なものへと発展した。それは贖罪の一形式、つまり断食者や他の者が犯した罪の悔恨の印、すなわち内的な清浄(カタルシス)を介して、神聖な力を受けるために望ましい状態とされていった<sup>5)</sup>。12世紀以降ヨーロッパでは、多くの女性が霊的生活に参

加するようになり、中でも極めて宗教的な女性は聖体拝領を渴望することから、断食は、印象的な偉業を達成する強さの重要な源であるとされた<sup>5)</sup>。

18~19世紀において、特に上流社会では女性の体形が「生殖的な型(ふっくらした体型)」から「砂時計型」モデルに置き換わっていった。その理由は、この世紀の主要な歴史的発展、つまり、女性運動や経済的ならびに生殖の自由から生じた危険に対する直接的解決法の一つとして行われた。「砂時計型」の体型を保つために上流社会の女性たちは食べ・吐きを日常的に行わざるを得なかった<sup>5)</sup>。

19世紀になって、拒食症が医学的治療の対象として考えられるようになっていった<sup>5)</sup>。1970年代より散見されていた本障害は、主に女性性拒否・陰性母性像・成熟拒否として認識されていた。しかし1980年代には家族関係の中で生じる葛藤や軋轢の反応としてのものであり、その自己不全感をダイエットによって徹底した自己身体の管理を貫くことで克服しようとしている<sup>4)</sup>と考えられるようになっていった。

【考察】人間にとって「食する」という行為は基本的欲求の一つである。その欲求を、人は様々な社会的背景の中で断食や拒食という形で表現してきた。特に宗教と結びついた自発的飢餓は、あくなき神への忠実な僕としての「聖なる行為」であり、一方、現代の摂食障害は、あくなき「瘦身への渴望」のために行う行為である。この二つの行為あるいは渴望には、強迫性が関与していると考えられる。

神経性無食欲症者が求め続けるものは、“やせ続けていきながらも生きていこうとする自己存在証明”であり、この心性はフロイトが述べている秩序を保ち、かつあくなき自分自身であろうとする強迫性格特徴と類似している<sup>2)</sup>。

【結論】人は古代・中世をとおして自然や宗教に対して畏れや帰依、浄化(カタルシス)かつ偉業を達成するための一つの形として食を断つという行為を行ってきた。近代・現代における「瘦身への願望」は、根底にある寄る辺ない自己不全感を自己の身体を徹底してコントロールすることで克服しようとしている。そこには強迫的心性があった。

### 【文献】

- 1)高橋三郎・大野裕監訳,DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル, 233~261,323~347,医学書院,2014.
- 2)フロイト(高橋義孝他訳),フロイト著作集5,377-384,医学書院,2003.
- 3)スージー・オーバック(鈴木二郎訳),拒食症 女たちの誇り高い抗議と苦悩,92~96,新曜社,1992
- 4)滝川一廣,子どものための精神医学,308~310,医学書院,2017.
- 5)ワルター・ヴェンダーエイケン,ロン・ヴァン・デート(野上芳美訳):拒食の文化史,青土社,31~36,41,104,280~288,1997.
- 6)下坂幸三:拒食と過食の心理 治療者のまなざし,126~127,岩波書店,1999.